

# 人形お菓子の家

## 菊池ふじの

### 第一場 森の中

グリムの童話ヘンゼルとグレーテルの中の、お菓子の家のあたりを中心として人形芝居化したして見ました。二場どいたしました。ヘンゼルとグレーテルの二人が、森の中をさ迷ひ歩いてゐる中に、遙か彼方に美しい家の影をみとめたので、それに近づいて見ると不思議にも自分達の大好きなお菓子で出来てる家だったので、こわくながらも堪りかねて食べ始めると、中から聲がして魔女が現れて、對話するあたりまでを第一場とし、その後魔女の家でグレーテルが働いたり、ヘンゼルが危ふく食べられ様としたこと、おしまひに遂々魔女を亡ぼして、ホットして二人でお家へ歸るところまでを第二場といたして見ました。

ヘンゼル——卵人形、紺のビロードの洋服に、茶の糸編みの帽子をかぶらせました。

同じく卵人形、エンシの洋服に赤の糸

グレーテル——あみの帽子をかぶらせる。

同じく卵人形、エンシの洋服に赤の糸

魔女——箱人形。頭に茶の毛糸で少し長い髪をつけ、顔は茶色に塗りました。鼻を釣合ひ

が悪い程高く、着物は、上を白、下を茶のラシヤで作りました。

背 景——森の中。

お菓子の家——茶ボールで拵へたお家の、屋根や、壁

等にビスケット、おせんべい等のお菓子を貼りつけました。このお菓子を、

繪で現してもいゝと思ひます。

——幕開く——

「二人が對話しながら出て来る。」

グレイテル「今日ももう夕方になつてしまつたのにまだお家がわからない。どうしませうお兄さん？」

ヘンゼル「そうだね、困つてしまふなあ、でも大丈夫だよ、何とかなるよ、この道をずつと行つて見よう。」

グレイテル「あゝお兄さん、こんな大きな樹がある。随分大きな樹ね。」

ヘンゼル「あゝ、大きい樹だね、空までとどきそうだ。この下は大きな樹のトンネルみたいだね、薄暗くて。あ、あつちの方に、きれいな啼き聲がしてるよ、ほらきこえるだらう。」

グレイテル「あ、ほんとにきれいな聲ね。何ていふ鳥でせう。森の中はほんとに面白いのね、いつまでも遊んで居たいけど、でもお家がわ

からなくて困つてしまふ。」

ヘンゼル「そうだね、どうしよう。と思案げにあたりを見廻す」あゝあつちの方に家が見える様だ、あそこで尋ねて見よう。」

グレイテル「そうね、あすこの家に、きつと人が居るわねえ、その人にきけば分るわね。」  
ヘンゼル「あゝ、分るだらう。早く行かう。」

「二人急ぐ、」

グレイテル「何だかあのお家、お菓子で出来てる様だわ、お兄さんご覧なさい、ね！」

ヘンゼル「あゝ、そうだね、たしかにお菓子だ、壁はビスケット、屋根はおせんべいの様、土臺の石はチョコレートだ。不思議な家だね、早く行つて見よう。」

グレイテル「ほんとに不思議だわね、早く行つて見ませう、お菓子の家なんて、丸で夢の様だわ、嬉しいなあ、早く行きませうお兄さん。」

「お菓子の家の前まで来る。」

ヘンゼル「あゝスバラシイなあ、こんな家、僕今

まで見たこともなかつた。すばらしいなあ！」

グレイテル「まあすばらしいこと！(見入る)こん

なお家に住んでる人はどんな人かしら？

のお家のお菓子食べてもいいのかしら？

わたしお腹が空いたわお兄さん。」

ヘンゼル「僕も空いて来た。こゝのビスケット一

寸食べやう。」

「と壁のビスケットをはがして食べる。」

グレイテル「わたしも食べるわ、わたしはこれが

食べたい。」

「と、土臺のチョコレートををはがして食べる、おいしいおい

しいと云ひながら幾つも食べると中から聲がして、」

誰だ

「と、魔女が家の窓から顔を出す。二人はおどろきあどずさ

りをする、魔女は、」

魔女「おゝ子供達、そんなにおどろかなくても

いい、逃げることはないよ。さあ来ておあがり、

たんとおあがり。」

「と、云ひながら魔女家の外へ出で来る。で、二人はまた近

寄り。」

二人の子供「おばさん、それではご馳走になりま

す。御馳走さま。」

「と、云ひながらまた食べ始める。それから、」

二人の子供「おばさん、僕達家へ歸る途がわから

ないんですか、どう行つたらいいでせう。教

へて頂裁な。」

魔女「あゝそうか、それは容易いこと、よく教

へて上げるよ、併し今日はもう遅いから、今

晩はわたしの家に泊つて、明日お歸り。中に

はおいしいご馳走が澤山あるからさあ内へお

はいり、さあさあ。」

二人「ハイ。」

「と、返事して、二人先きに内へは入る。魔女、外で考へながら獨言する。」

魔

女「あの男の子は肥つて、おいしいそうだからもつと肥らして食べてやらう。それからあの女の兒は、わたしの下女にして使ふのに丁度いゝ鹽梅だ。」

と、うなづきながら魔女も後より入る。

幕

## 第二場 魔女の家

室内の背景

左方向ふ隅のあたりに、お釜のかけてある甕の繪を描く、そして甕には火が燃えて居り、甕の三方に切目を入れて、こゝから魔女が落ちこられる様にしておく。その他の所は室内の有様よろしく描き置く。

——開幕く——

「魔女上手の方より舞臺に現れる。獨言を云ふ。」

魔女「今日で五日にもなるのにあの男の子はち

つとも肥らない、毎日おいしいものを與へて肥らさうとしているのにどうしたつて云ふんだらう。めんどう臭いからもう今日は食べてしまふ。それにはお釜にお湯を沸さねばならん。あの女の兒を呼んでさせやう。」

「と、向ふの方を向いて、」

魔

女「これこれ、グレイテルやグレイテル、早くこゝへお出で、早くだよ、早く、早く。」

「ハイ」と、向ふから返事がきこえて、グレイテル下手の方より入り来る。

グレイテル「おばさん何のご用？」

魔女「あゝグレイテルか、今日はね、もうあのヘンゼルを食べてしまふ。だから、そのお釜を沸かすんだよ、早くだよ、わかつたか。」

グレイテル「あら！ おばさん、どうぞそんなことしなさいで下さい、お願だからお兄さんを食へないで下さい。」

「と、泣かんばかりにして頼む、魔女そんな事にはおかまひ

なしに。併しそや邪けんな聲でもなしに」

魔女「黙れこの小娘！ 今まで毎日ご馳走をやつてゐたのにちつとも肥らないじやないか、めんどろ臭いから、もう今日は食べてしまふんだ、何をくずく云ふか、早く火を焚きつけろ、くずくしてると承知しないぞ。」

「で、しほくとしてグレートル取りかゝる。なか／＼うまく焚きつかない。魔女じれつたがつて、自分で出て行つてアツく小言云ひながら、かゝんでもしつける。そこをグレートル、魔女の後より力一ぱいに押すと、ふいを打たれた魔女、一たまりもなく、竈の火の中こゝろび入る。」

グレートル「あゝよかつた。」

「と、ホットして」

グレートル「お兄さん、お兄さん。」

「と、呼びながら室の外に出て行く。間もなく、二人で話しながら入り来る。」

グレートル「ほんとによかつた。もう少しでお兄さんが食べられてしまふところでしたね。」

ヘンゼル「あゝよかつた。もうこんなところにく

づくしないで早くお家へ歸らう。」

と、二人で室を出る。

幕

(五三頁よりつゞく)

副はむが爲には「お話をする前に先づ其あらゆる情景を明に己が心眼に映せしめ、其一々の心情の動きを切實に感得せねばならぬ。此心の準備さへ充分であるならばたとひ人数は多くても又其他の副次的條件に多少缺くる所ありとも必ずや成功を収め得べく、若しこの心の準備に欠くる所があれば他の條件が如何に具備してゐても其お話の効果は極めて稀薄なるものとなり終るであらう。